

## 実践報告

# ブラジル日系永住高齢者の食の意味を踏まえた 生活習慣病予防に関する保健指導の検討

Study of Health Counseling for Preventing Lifestyle-related Disease based  
on the Meaning of Eating in Elderly Japanese-Brazilian People

杉山佳菜子<sup>1)</sup> 臺 有桂<sup>2)</sup> 佐藤 美樹<sup>3)</sup> 今松 友紀<sup>2)</sup> 糸井 和佳<sup>4)</sup>  
Kanako Sugiyama Yuka Dai Miki Sato Yuki Imamatsu Waka Itoi

河原 智江<sup>5)</sup> 田口(袴田)理恵<sup>2)</sup> 根本 明宜<sup>6)</sup> 森口エミリオ秀幸<sup>7)</sup>  
Chie Kawahara Rie Hakamada-Taguchi Akinobu Nemoto Emilio H Moriguchi

水嶋 春朔<sup>8)</sup> 田高 悦子<sup>2)</sup>  
Syunsaku Mizushima Etsuko Tadaka

キーワード：ブラジル日系人、高齢者、食の意味、生活習慣病、保健指導

Key Words : Japanese-Brazilian , elderly, meaning of eating, lifestyle-related disease, health counseling

## I はじめに

国策として日本からブラジルへの移民が始まって100年以上が経過し、現在では日系永住者は約150万人以上に上る<sup>1)</sup>。戦後に移住したブラジル日系永住者1世は高齢期を迎え、ブラジルで生まれ育った2世も、65歳以上に達している。

ブラジル在住の日系人を対象とした先行研究によれば、日系人は動物性たんぱく質や脂質・糖質の摂取が多く<sup>2)</sup>、日本在住の日本人に比べ、高コレステロール・高血圧・肥満の割合が高く、虚血性心疾患の罹患率・死亡率のリスクが高いこと<sup>3)</sup>が明らかにされている。このような高血圧や脂質異常症、虚血性心疾患といった生活習慣病が増加する背景には、ブラジルに在住することによる食の西欧化が発症要因となっていることが窺える。この状況は、ブラジル日系永住高齢者（以下、日系高齢者）にも当てはまり、生活習慣病の健康課題を抱えていることが考えられる。

また、日系高齢者の多く<sup>4)</sup>は、都市部からアクセスが不便で、かつ病院や診療所が少ない開拓地に入植しており、

その生活言語は日本語であるため、公用語であるポルトガル語に不便を抱えている現状がある。今回調査を行った南ブラジル（南リオグランデ州、サンタカタリーナ州）の日系高齢者の多く<sup>1)</sup>も、病院や診療所のある近隣都市まで車で1時間以上かかる場所に生活しているといった物理的な要因、日本語が生活言語であるといったコミュニケーションの要因から、医療機関への受診や薬局での医薬品の購入などに困難を抱えている。

以上より、日系高齢者は生活習慣病の健康課題を抱えているにもかかわらず、生活習慣病に関する情報量や予防の知識、保健指導や健康相談などのサポートを受ける機会が限られている環境にある。そのため、日系高齢者の主体的な健康増進の方略が必要であり、生活習慣病予防に関する支援は不可欠だと考える。

私たちの生活習慣は、生まれ育った環境や価値観、文化などに影響され築きあげられている。そのため、日系高齢者の生活習慣病予防に関する支援を行うには、日系高齢者の生活習慣とその背景を知ることが必要である。また、日系高齢者の生活習慣の中でも、食は生活習慣病に影響を与

Received : October. 31, 2012

Accepted : February. 20, 2013

1) 横浜市立脳血管医療センター

3) 横浜市立大学大学院医学研究科看護学専攻修士課程

5) 横浜創英大学看護学部看護学科広域看護学

7) ブラジル連邦共和国リオグランデスール連邦大学医学部

2) 横浜市立大学大学院医学研究科看護学専攻地域看護学

4) 元横浜市立大学大学院医学研究科看護学専攻地域看護学

6) 横浜市立大学附属病院医療情報部

8) 横浜市立大学医学部・医学研究科医科学専攻社会予防医学

える大きなファクターであると考えられ、日系高齢者の食に関連する価値観に着目することは意義があると考えられる。これまで、ブラジル日系人の食事の実態を明らかにした調査研究<sup>2)</sup>はあるものの、日系高齢者の食に対する思いや食の持つ意味について検討した研究はない。

そこで本稿では、調理を含めた家事の主たる担い手である女性を対象に、日系高齢者の食に対する思いや価値観、役割といった食の意味を明らかにし、生活習慣病予防における保健指導に関する基礎資料を得ることを目的として、インタビューを実施したのでここに報告する。

なお、本インタビューは、平成23年度横浜市立大学海外フィールドワーク支援プログラムとして参画したブラジル日系永住者を対象とした巡回診療健診の一環として実施した。ここでの巡回診療健診とは、南日伯援護協会（会長：森口幸雄教授、副会長：森口エミリオ秀幸教授）により、ブラジル南部（南リオグランデ州、サンタカタリーナ州）に移住する日系永住者を対象として年に1回行われている、日本語とポルトガル語による健診・保健事業である。

## II 方法

### 1. 対象地域

フィールドワークの対象として、健診で訪れる集落の中で、住民数などの規模が同じであり、コロニア（日系人が移住して作った開拓地及びコミュニティの総称）に基づいた産業が根付いている生活形態を維持しているといった特徴をもつ集落を選定した。

### 2. 対象者

主要な情報提供者（以下、インフォーマント）<sup>5)6)</sup>は、ブラジル連邦共和国リオグランデ州にある日系集団移住地イボチ及びサンタカタリーナ州ラーモスの巡回診療健診に受診した日系永住者で、日本語による面接が可能であり、調査協力の承諾が得られた65歳以上の女性を対象とした。

### 3. データの収集方法

データの収集方法は、地域看護診断の方法論の一つであるエスノグラフィックアプローチ<sup>6)</sup>に基づいた。具体的方法は、インタビュー、既存資料、参加観察などである。インタビューの精度を高めるため、インタビューと並行して既存資料や参加観察で得られたデータの検討を行った。

Spradley<sup>6)7)</sup>はエスノグラフィーについて、特定の状況にある人びとの生活についての実証的なデータを生み出すとしている。エスノグラフィーを取り入れることは、人びととかかわりながら、その生活を理解し、潜在的、顕在的な課題を見出し、人びとと共に支援を考えていくための手段として、実践や教育に有用であると考えられている。

### 1) インタビュー

インタビューは、研究者とインフォーマントの1対1あるいは1対2とし、研究者が作成したインタビューガイドに基づき半構成的面接法にて行った。インタビュー内容は、日系高齢者にとっての食に対する思いや価値観・役割など、食の意味についてとした。

面接時間は、30～40分程度であり、すべてのインタビューの内容は、インフォーマントの同意を得て、ICレコーダーに録音した。

### 2) 既存資料の活用・分析

人口統計資料、海外移住統計資料、南日伯援護協会事業報告書、JICA海外移住資料館の展示物・展示案内などから情報を収集し、インフォーマントの生活を理解するように努力した。

### 3) 参加型観察

インフォーマントの理解を深めるために、地区踏査や家庭訪問を実施し、コロニアでの生活状況や習慣について観察した。

### 4. データ分析方法

データ分析は、録音したインタビュー内容をすべて逐語録化し、次いで、日系高齢者の食の意味に着目し、逐語録の文脈ごとにデータを抽出、要約（コード化）した。それらのコードの内容に応じて分類・整理してサブカテゴリー化し、サブカテゴリーの意味内容に着目し、カテゴリーを抽出した。なお、分析にあたり、フィールドワーク中に参加観察し得た事柄や既存の資料から得た情報を参考にした。データ分析は、スーパーバイザーと検討を重ね、信頼性・妥当性を高めるように努めた。

### 5. 倫理的配慮

現地で展開されているブラジル連邦共和国南リオグランデ大学ならびに横浜市立大学による巡回診療健診の管理者へ研究者より、調査趣旨、インタビュー方法、家庭訪問方法、インフォーマントの選定、留意点、倫理審査の承認を得た調査であることを口頭および書面で説明し、同意を得た上で、インフォーマントの紹介を受けた。その際、インフォーマントとのインタビューの日程調整を行った。その後、インフォーマントへ研究者より、調査趣旨、インタビュー方法、健診データの使用方法、留意点を口頭および書面で説明した。インタビューへの参加は任意であり、参加しなくても診療や健診・保健指導に支障が生じないこと、インタビューの途中でも参加を撤回することが可能であることを保障した。また、個人情報の取り扱いについて厳重に保管・管理を行い、個人が特定できない形で分析するよう配慮した。

本研究は、横浜市立大学医学部看護学科卒業研究にかかわる倫理審査会（受付番号0630-083307、平成23年6月30日）による承認を受けた。

Ⅲ 結果および考察

1. 対象地域の概要

対象とする地域をイボチとラーモスの2コロニア<sup>1)</sup>とした。

イボチは、リオグランデ州の州都ポルトアレグレ市より南方50Kmに位置する山岳丘陵地帯にあり、日系世帯数は30世帯であった。主な産業は農業で、特にブドウや生花、野菜の栽培が盛んな地域である。

ラーモスは、サンタカタリーナ州中央に位置し、標高700~800mの高原地帯であった。日本と同じような四季がある地域であり、日系世帯数は20世帯であった。主な産業は農業で、梨、林檎、桃、生花の栽培が盛んである。

2. インフォーマントの概要 (表1)

インフォーマントは、日系高齢者の女性5名であった。年齢は、65歳から77歳であり、3名が1世であった。4名が家族と同居し、1名は独居であった。しかし、独居の1名を含めた3名は、子が日本へ出稼ぎに行き不在のため、未成年の孫と生活を共にし、親の代役を果たしていた。健康状態では、2名は生活習慣病を抱えており、継続的な服薬を行っていたが、障害高齢者の日常生活自立度<sup>8)</sup>は全員がJ1であり、日常生活や仕事には支障がない状態であった。また、全員が農業を営んでおり、主たる調理者であった。

3. 日系高齢者にとっての食の意味

分析の結果、14のサブカテゴリー、5つのカテゴリー【家族の健康を守る】【働くという生きがいをもたらす】【かけがえのない家族との絆を深める】【仲間との結びつきをつくり出す】【日本人としてのアイデンティティを保つ】が導き出された(表2)。以下に各カテゴリーの内容を説明する。

抽出された、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >, 語りを「 」と表記する。

1) 【家族の健康を守る】

日系高齢者全員が主たる調理者の役割を担っており、「健康が一番簡単に言うと、食べ物に気をつける、それで健康を守るのが一番」(E氏)のように、健康を意識して調理していることが語られ、食は家族の健康を維持する基本となるものであった。また、子が日本へ出稼ぎに行っているため孫と生活することになった日系高齢者は、親の代役も果たしていた。そのため、家族の成長を考え調理することを意識しており、食が家族の成長を支える役割を果たしていた。独身の息子と同居する日系高齢者は、息子の外食が多いことは体に良くないと考えており、息子の健康を考えメニューを工夫していた。このことから、大切な息子に手料理を食べさせたいという思いが見出され、食が家族への愛情を伝えるものとして存在していた。さらに「薄味になってますよね、塩分の設定が。控えめですよね」(D氏)の語りのように、日系高齢者にとって日本食はブラジル食に比べ体に良い食事として認識されており、日々の食事の中に体質に合った日本食を取り入れることが行われていた。一方、家族や自分の病気体験から食事に気を付けていることが語られ、食によって病気や障害の予防や悪化を防ぐことが見出された。

以上のことから、日系高齢者は食によって大切な【家族の健康を守る】ことに努めていた。

2) 【働くという生きがいをもたらす】

日系高齢者全員が農業を営む経験をしており、50年以上の移住生活のほとんどを働いて過ごしてきた。日系高齢者からは、苦勞してきたことも語られたが、働くことに誇りを感じていることも語られた。そして、「私にとって働くことが一番大事。私から仕事を取り上げたら、私は元気ではないと思います。だから食事に気を付けている」(E氏)のように、働くために食に気を付けている様子が語られ、日系高齢者にとって食が働くための原動力となることが見出された。

表1 インフォーマントの概要

	A氏 (77歳・1世)	B氏 (75歳・1世)	C氏 (65歳・2世)	D氏 (65歳・1世)	E氏 (65歳・2世)
地 区	イボチ	イボチ	ラーモス	ラーモス	ラーモス
同居家族の状況	夫は他界しており、独居。現在、子は日本へ出稼ぎに行っている。	夫は他界しており、孫3人と4人暮らし。現在、子は日本へ出稼ぎに行っている。	夫と孫4人と6人暮らし。現在、子は日本へ出稼ぎに行っている。	1年前に夫が事故で他界。独身の長男と障害者の長女と3人暮らし。	夫・独身の長男と3人暮らし。
健康状態	良好	白内障	肥満	高血圧 肥満・糖尿病	脂質異常症
暮らしぶり	独居ではあるが、食事時には近所に住む嫁や孫が訪れ、6人で食事をしている。余暇活動として、1世の仲間同士で、ゲートボールや体操を行っている。	未成年の孫3人と同居し、親代わりとして孫を育てている。自身も、日本へ出稼ぎに行っていた経験を持つ。余暇活動として、1世の仲間同士で、ゲートボールや体操を行っている。	未成年の孫4人と同居し、親代わりとして孫を育てている。夫と共に桃や梨などの果樹を育てている。料理が得意で、栽培した果樹で、ジャムや果酒などの加工品も作っている。	広大な土地を長男と次男家族で果樹の栽培を手掛けている。繁忙期は、ブラジル人の使用人を雇うこともある。自身も、日本へ出稼ぎに行っていた経験を持つ。	夫と長男と3人で果樹の栽培を手掛けている。仕事が忙しく、ブラジル人の使用人を雇っている。自身も、日本へ出稼ぎに行っていた経験を持つ。
職 業	元農業	元農業	農業	農業	農業

表2 ブラジル日系永住高齢者の「食」の意味

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
家族の健康を守る	健康を維持する基本となる	家にいる時間が長いお母さんが家族の体のいいものを作る	
		食べ物に気をつけて、健康を守ることが一番である	
	家族の成長を支える	自分が料理して家族の健康を守っている	
		これからも夫と一緒に働きながら暮らしていけるよう、健康でいてほしいと願っている	
	家族への愛情を伝える	家族で果樹の仕事をするために自分たちが健康で働き続けたいという気持ちがある	
		自分のまわりの若いブラジル人は血圧が高く内服しているが、自分が何でもないのは食生活がいいと考えている	
	体質に合った日本食を取り入れる	育ち盛りのため、孫たちは必ず肉を食べている	
		孫たちの成長のため、無理してでも食べるよう、食べ物の大切さを伝えている	
	病気や障害の予防や悪化を防ぐ	孫たちが来て、自分たちの食卓のメニューや調理法が、孫たちがよく食べ、体にいいものに変化した	
		外食が多い息子のために、自分が不在な時でも家族が手料理を食事できるようにしている	
息子に合わせ、食べごたえのある肉料理や卵、魚料理を必ず一つ入れるようにしている			
ブラジル食では、油を多く使うので、日本食を続けている			
働くという生きがいをもたらす	働くための原動力となる	日本食は塩分が控えめなことが関係し、日本にいるときは血圧が下がる経験をした	
		日本から帰ってきたら体重は増えたが、おなか周りが減るという体験をし、食事が関係していると思う	
	相手が喜ぶことに幸せを感じる	日本の食事は淡泊、ブラジルの食事は味が濃いと感じている	
		夫の体調の変化により、家族の健康のために食事に気をつけるようになった	
	かけがえない家族との絆を深める	自分は糖尿病や高血圧があり、食事に気をつけないといけないと感じている	
		夫は降圧剤を内服しており、一度内服したらやめられないのを知っているので、気をつけている	
	仲間との結びつきをつくり出す	夫が肥満やコレステロール、高血圧があることで、料理に神経を使って健康を守るようになった	
		夫の血糖値が高く、そのために料理に気を使っている	
	日本人としてのアイデンティティを保つ	日本食を食べる楽しみをもたらす	痛いところはあっても、仕事を毎日続けられて、今日も無事に過ごすことができていることで健康とを感じる
			自分の中で働くということが一番大事、仕事を取り上げられたら元気はでないと思う
日本人であることを実感する		仕事を取り上げられると、生きがいなくなつまらない人生だと思う	
		年金を使っても、仕事は続けたいという思いがある	
日本文化を伝承する	仕事お腹がすかないように、きちっと三食食べている		
	子どもが一人でも家にいて、一緒に働けることは幸せである		

また、「大変だけど、楽しみよ。『これ、おいしいね』って言われると、良かったって」(D氏)のように、忙しい中でも調理し、食べた人から感謝されることは喜びであると語られ、食を通じて「相手が喜ぶことに幸せを感じる」ことが見出された。

以上のことから、畑に出ることや家事を担い料理を作るといった働くこと自体が日系高齢者にとって生きがいであり、働くことと食は密接に関連していた。つまり食は日系高齢者に【働くという生きがいをもたらす】ことを意味していた。

## 3) 【かけがえのない家族との絆を深める】

「誕生日や記念日は自分たちで料理している」(B氏)の語りのように、日系高齢者は記念日やイベントなどの特別な日には料理を作り、家族で食卓を囲むことが定番となっていた。そして家族で食卓を囲む時間は、共に喜びや楽しみを分かち合う時間にもつながっており、食が「記念日やイベントにおける楽しみとなる」ものとして存在していた。また、「食事の時くらいですもの、3人そろっているっていいのはね」(E氏)の語りのように、農業で忙しくなかなか家族で顔を合わせる時間がないため、食が「家族がそろう機会となる」ことでコミュニケーションをとっていた。

以上のことから、日系高齢者にとって家族はかけがえのない存在であり、食は【かけがえのない家族との絆を深める】という意味を有していた。

## 4) 【仲間との結びつきをつくり出す】

日系高齢者にとって、若い頃から苦勞を共にし、生きてきた同世代の日系人は同志であった。そしてコロナ内には「野菜のおすそ分けをしている」(A氏)や、「コロナに来院があるときは女の人同士で料理してもてなすのよ」(C氏)といった日系人同士の結びつきが存在していた。特にラーモス地域では、日本の伝統と文化をブラジルに紹介する一環として、コロナが一体となって祭りを実施していた。「コロナの桜祭りには、婦人で集まってね。自分で作ったお菓子や、干し柿を売店に出していました」(E氏)の語りのように、食によって「日系人同士のつながりを深める」ことが見出された。

一方、日系高齢者には、広大な土地で農業をするために労働者として雇用したブラジル人や、生活を通して親しくなったブラジル人との交流も存在していた。そして「食事が恒例行事」(D氏)の語りに代表されるように、食が「ブラジル人との交流をつくり出す」ことが見出された。

以上のように、日系高齢者にとって食は、【仲間との結びつきをつくり出す】ものとして存在していた。

## 5) 【日本人としてのアイデンティティを保つ】

日系高齢者がブラジルに渡ってきた頃、日本食に必要な調味料や材料はほとんど手に入らない状態であった。そして、「やっぱり郷土料理っていうのはいいですね。懐かしいです」(D氏)の語りのように、食を通じて日本とのつながりを感じており、遠い日本へ思いを馳せながら、様々な工夫を凝らして日本食を作り上げてきた。「もうささやかな、贅沢なの、日本食を食べられるのは」(B氏)のように、日本食を食べることが、つらい移民生活の一つの喜びであることが語られ、食は「日本食を食べる楽しみをもたらす」ものとして存在していた。また、「日本人だから日本のものを食べる」(A氏)のように、日系高齢者にとって日本食を食べることは当たり前のものであり、ブラジルでの生活の中で日本食を食べたときに、自分自身が「日本人であることを実感する」ことが見出された。

さらに、自分なりに試行錯誤してきた調理法を家族に伝

承していきたいという思いがあり、長い移民生活で生まれた調理法によって日本食を伝えていくことを実践していた。「お正月になるとお餅が食べたいでしょ。でもないから、みんなで工夫して似たようなものを作ってね」(A氏)のように、日本の四季折々の行事を食生活に取り入れるなど、食によって「日本文化を伝承する」ことが見出された。

以上のことから、日系高齢者のスピリチュアルな部分には、日本人としてのアイデンティティが存在しており、食は【日本人としてのアイデンティティを保つ】手段として存在していた。

## 4. 食の意味を踏まえた保健指導への示唆

## 1) 生活習慣病予防の必要性と保健指導の方向性

日系高齢者が、脳卒中や糖尿病などに代表される生活習慣病に罹患することは、ADLを低下させ、ひいては生活の質を低下させる可能性がある。日系高齢者が生活習慣病の健康課題を抱える集団であることを踏まえると、生活習慣病予防への取り組みは必要となる。患者教育について河口<sup>9)</sup>は、「生活には、生命・生存、生活習慣・社会的活動・生計・暮らしむき、価値観・信条・生き方の側面がある。看護者は、対象者との相互作用のなかで『その人の生活そのものの事実』と『その人にとっての意味』を健康との関連から捉える」必要性を述べている。そのため、日系高齢者のブラジルにおける生活を知り、多くの経験をしてきたことを理解し、長年の生活習慣が持つ意味を捉えることが重要である。また、農村部での生活習慣病予防の保健指導について丸谷<sup>10)</sup>は、地域の時代背景・職業・社会構造を踏まえた生活や価値観、健康習慣を理解する重要性について述べている。本調査の結果では、ブラジルで生活する日系高齢者にとって食は、健康を維持する手段であり、家族と共に喜びを分かち合い生きがいを感じながら、自分らしく生活していくための取り組みといった多様な意味を有していた。そのため日系高齢者に対する保健指導では、食の意味を総合的に捉え、生きがいや喜びにも目を向け、苦勞して働き続けてきた経験や誇りを理解し支持しながら支援していく姿勢が重要となるだろう。

さらに、日系高齢者の生活するコロナは医療へのアクセスが不便な環境にある。そのため、日系高齢者が主体的に健康を維持する力を引き出し、支持する保健指導が必要になる。大森<sup>11)</sup>は、「地域性や職業・生活歴、身体状況から、高齢者の誇りを維持するための手立てを理解して認めること、身に付けてきた知識や技術を手がかりに、誇りを維持するための手立てをともに見つけ出すこと」が高齢者の主体性を引き出すと述べている。日系高齢者にとって、農業を営むことや家事労働を行うといった働くことが誇りや生きがいであり、食によって【働くという生きがいをもたらす】ことが見出されたことから、今後も誇りを続けられるような支援を行うこと有意であると考えられる。

## 2) 具体的な保健指導方法

### (1) 家族単位の支援

病気体験や病気に対する恐れは、病気対処行動を左右する条件<sup>12)</sup>と言われるように、日系高齢者が【家族の健康を守る】背景には、家族や自分の病気体験が存在し、食によって健康を維持しようとしていることが明らかになった。一方、【かけがえのない家族との絆を深める】のように、日系高齢者にとって家族と食卓を囲む時間は、コミュニケーションをとる大切な時間として存在していた。食卓を囲むことは自然にコミュニケーションが生まれ、さまざまな学びと気づき、アサーティブな訓練もなされると報告されている<sup>13)</sup>。そのため、支援の対象を日系高齢者だけに向けるのではなく家族単位への生活習慣病予防の働きかけを行うことで、家族成員がお互いの体調を気にかけることや同じ目標に向かった取り組みを行うなどの、家族全体の健康の維持・増進につながると考える。

### (2) 仲間とのつながりを活用した支援

食は仲間意識、共同体としての帰属意識を持つことを意味する<sup>13)</sup>と言われるように、日系高齢者が食によって【仲間との結びつきをつくり出す】ことが見出された。つまり、仲間と共に食事をすることは、お互いの価値観を認め合い、自分らしくいることができる時間であり、つながりをつくり出す場になっていると言える。このような人との良好なつながりは、抱えた問題や悩みがあっても、積極的に対処しようと行動することと優位な関連がある<sup>12)</sup>と言われている。以上より、日系高齢者にとって仲間との結びつきはコロナの強みとなりえる。このことから、コロナにおける有効な保健指導の方法として、集団指導のような仲間とのつながりを活用した支援が考えられる。また集団指導によって、今後次世代を担う2世や3世へ健康に関する取り組みが広がり、コロナ全体の健康づくりにつながっていく可能性も有しているだろう。

### (3) 日本人としてのアイデンティティを尊重した支援

【日本人としてのアイデンティティを保つ】のように、日系高齢者のブラジルでの生活の中には、日本食を作り食べることを楽しみ、自分自身が日本人であることを実感し、日本の文化を愛しむといった日本人としてのアイデンティティが根本に存在していた。1990年にブラジルのポルトアレグレ地域・イボチ地域の戦後移民1世を対象に行われた調査<sup>14)</sup>(ポルトアレグレ地域42名、イボチ地域38名)では、性別や地域別に関係なく全ての日系移民の人々が日本を“かなり懐かしい”と思っているとの結果が示された。このような日系高齢者の日本への思いは、ブラジルに渡り生活してきたからこそ抱く思いであるため、この思いを尊重し支援をしていく必要があると考える。

## 謝 辞

本研究の一部は、平成23年度横浜市立大学海外フィールド

ワーク支援プログラムの支援を受けて実施いたしました。

本研究にご協力下さいましたブラジル日系永住者の皆様、南日伯援護協会、独立行政法人国際協力機構(JICA)横浜センター(海外移住資料館)の皆様深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 横浜市立大学医学部医学科・看護学科編：平成23年度横浜市立大学海外フィールドワーク支援プログラム「ブラジル日系永住者巡回診療実習報告書」：22-23, 90-96, 2011.
- 2) 長沼理恵, 城戸照彦, 佐伯和子：一地方都市で働く日系ブラジル人の食生活行動に関する記述的研究, 日本地域看護学会誌, 8(2)：28-35, 2006.
- 3) 松木秀明, 横山公道, 小川哲平, 他：日系ブラジル人の生活習慣病因子に関する研究, 東海大学健康科学部紀要, 9：1-9, 2004.
- 4) 井ノ上俊介, 大山慶子, 田口徹也, 他：ブラジルにおける日系高齢者の生活に関する調査研究, 公衆衛生, 65：628-633, 2001.
- 5) Spradley, J.P. : The Ethnographic Interview, Harcourt Brace Jovanovich College Publishers, New York : 1979.
- 6) 金川克子, 田高悦子：地域看護診断第2版, 東京大学出版社, 東京：21-60, 2011.
- 7) Spradley, J.P. : 田中美恵子, 麻原きよみ監訳, 参加観察法入門, 医学書院, 東京：21-22, 2010.
- 8) 平成3年11月18日老健102-2号厚生省大臣官房老人保健福祉部長通知, 厚生労働省, 東京：1991.
- 9) 河口てる子：患者教育のための「看護実践モデル」開発の試みー看護師によるとっかかりー手がかり言動とその直感的解釈・生活と生活者の視点・教育の理論と技法・そしてProfessional Learning Climate, 看護研究, 36(3)：3-12, 2003.
- 10) 丸谷美紀, 大澤真奈美, 雨宮有子, 他：農村部における地域の文化を考慮した生活習慣病予防の保健指導方法ー健康を志向した地域の文化を育むことを意図して, 日本地域看護学会誌, 13(2)：7-15, 2011.
- 11) 大森純子：高齢者にとっての健康「誇りをもち続けられること」農村地域におけるエスノグラフィーから, 日本看護科学会誌, 24(3)：12-20, 2004.
- 12) 宗像恒次：最新行動科学からみた健康と病気, メジカルフレンド社, 東京：129-138, 1996.
- 13) 佐甲隆：「食べること」から保健師の活動を読み解くー食を通じたコミュニティエンパワメント, 保健師ジャーナル, (64)11：985-989, 2008.
- 14) 島久洋：戦後ブラジル移民の望郷の念, 国際文化論集, 9：27-48, 1994.